上高井教育会報

第199号
発行所　上高井教育会
発行人　上高井教育会理事長　宮入英俊
編集人　会報編集委員長　朝間春子
印刷所　須坂新聞社

同好会から地域への発信

同好会副会長　小山修二

本年度の同好会が、新たに発足した「上高井の総合的な学習を考える会」「子どもの本研究会」を含め十六同好会でスタートしました。

この夏の「夏期同好会集中日」、地歴同好会では「千曲川の源流を訪ねて」と題して佐久地方の巡検を、理科同好会では、米子不動滝から菅平への登山道に見られる植物と地質調査を、哲学では信大の教授をお迎えしての講演会等、それぞれの同好会で意欲的かつ内容のある研修が行われたとの報告がありました。

今年度の夏期同好会の特徴的なことは、各同好会の出席者の中で会員以外の一般からの参加者が多く見られたことです。各同好会の一般からの参加者をみますと、美術の十三名を筆頭に、カウンセリングの七名など合計三十六名に上ります。生涯学習の時代となった今、地域の方の中には学ぶ意欲を持った方々が大変多く居られることを実感させられます。中には、この夏の同好会に毎年楽しみにして参加している方もおられるようです。このことは、上高井同好会としての活動が地域の中に少しずつ位置づいてきていることの表れではないかと思われます。

そこで、上高井教育会の同好会を、会員の研修の場のみにするのではなく、「地域の方々とともに歩む」という視点での発想の転換をしていくことがこれからの同好会の歩むべき一つの道ではないかと思います。例えば、音楽同好会では著名な指導者を講師にお呼びし講習会を行っていますが、そこに地域のコーラスグループも参加していただきながら共に学び合うとか、子どもの本研究会では、読み聞かせグループとの交流を通して学び合うなど、同好会から地域へ発信していくことが大切ではないかと思います。このことは、地域の方々と先生方が共に学び合い、お互いにつながり合うことができ、「開かれた教育会、地域の方に理解される教育会」にも大きく寄与するものと考えます。

H15.8.1　理科同好会菅平にて

各同好会では、今年度の成果を踏まえつつ、来年度の計画案作成の中で、「同好会から地域への発信」という視点を付け加えながら、新たな同好会の方向性を模索していって欲しいと期待します。

（常盤中）

本校の中核活動――百三十周年記念事業に関わって

須坂小学校

本年度、須坂小学校は創立百三十周年を迎えた。

子ども達にとっては、学校が歩んだ道を生活科や総合的な学習、または関連の教科において調査活動や体験活動をすることを通し、今、ここに学ぶ喜びと誇りを持ち、地域社会の一員として所属感や連帯感をはぐくむ年になることを願った。その願いのもと、ＰＴＡ・地域の資金面や環境・教材に関わる支援、家庭内での側面的指導等の協力を仰ぎながら、百三十周年記念を盛り込んだ音楽会や運動会、生活科・総合的な学習の発表の場である『くぬぎ祭』の充実、子どもも喜び、学習に役立ち、地域の自然や人材に感謝を表す記念品にまつわる学習を展開してきた。

くぬぎ祭の開催式は、百三十周年記念の式典の意味合いを込め、各学年で調べた昔の学校や勉強・学校生活の様子など、今と比較しての発表を加えた。創立以来の校舎の変遷～昔の学校生活の様子、浅井冽作詞の旧校歌斉唱、校章、百メートルプール、校庭運動会、昔の遊び、菅平・峰の原体験学習、須坂市の産業と学校との関連などであった。

記念事業としては、航空写真や全員の集合写真などを配した下敷きを全校児童及び来賓支援者に、資料提示装置を全学年とＯＨＰの配備、合計九メートルの学校沿革史を常設掲示、これらをＰＴＡによるバザーと今年初めての資源回収の収益からいただくことができた。また昨年来からの鎌田山の伐採で出た木を利用して、子どもたちの手による記念品のキーホルダーやコースター製作もお礼に心を込める学習の一つとなった。

「かんだ山のくぬぎの木でつくったキーホルダーとコースター」

どの学校もそうであるように、地域に開き、地域の人々とともに関わり合って教育を展開していく今日にあって、地域や家庭とつながりを多くした生活科・総合的な学習であることはもちろんのこと、今年のこの事業を進めるに当たって、地域の方が資源集めの一助にと、寒風の中、空き缶拾いをしてくださったり、花いっぱい大会に合わせ、親子で汗を流せる活動のＰＴＡ花壇を作り、こつこつと手入れしてくださったり、等々、学校の地域・家庭に、因って立たせていただいている感を強くした本年度の中核活動であった。

（永井教雄）

教育会だより

9・6　郡研究推進委員会④
9・8　教育会講演会（於 須坂市文化会館）
9・16　○講師　東京大学大学院教育学研究科教授　佐藤　学先生
○演題「学びを中心とする授業の創造」
9・30　第5回同好会
10・4　第4回理事会
10・16　第5回代議員会
10・28　郡研究推進委員会⑤
10・30　上高井教育研究集会（於 相森中学校）
11・7～31　第6回同好会
11・14　第5回理事会
郡研究推進委員会⑥
日本連合教育会富士大会
本会から三名参加
信濃教育会全研究集会（於 北信小・東部小・栄中）
郡公開研究会
田中統治先生ご指導
11・15　特別活動研究委員会（於 旭ヶ丘小学校）
「信州〝教育の日〟」
松本大会
11・19　教育会中間会計監査会
12・26　第6会理事会
12・5　第6回代議員会
12・9　第7回同好会
12・16　研究委員長会②
12・15　上高井教育会会報第199号発行

日々研鑽

総合的な学習の時間
英語活動から学ぶ
日滝小学校

本校は、本年度、郡研究授業にあたり小学校における英語活動の授業提供という貴重な機会をいただいた。そこで、この機会を子ども達にとって実りあるものにしたいと考え、総合的な学習における国際理解教育を柱とし研究テーマ「子ども達が、英語や異文化に対して興味・関心を高めながら、意欲的に取り組む英語活動の在り方」を据えて研究を進めてきた。研究の経過の中では、様々な学年で実証授業を行い、以下のことを具体的手だてとして考えた。それは、「児童が主体的に活動する場の設定」「クイズ・ゲームなど五感や体験活動を取り入れた学習活動の設定」「既習学習の定着と新しい言語の習得の場の設定」である。

十一月十四日に行われた郡研究授業では、子ども達自らが英語活動のクイズ・ゲームコーナーの計画・準備・運営を行い、出題者と解答者を交代しながら活動する場面を取り入れた。授業の中では、合い言葉の英語の表現を考えたり、ヒントコーナーを作ったりなど一人一人が自分のコーナーにおける役割を意識しながら意欲を高め、主体的に活動しようとする姿があった。

また、何度も繰り返し英語の挨拶をしたり、様々な英語の言葉を調べて表現したりなど、楽しみながら自然に英語に親しみ、活動を重ねながら、生き生きと自信をもって表現する子ども達の姿も見られた。授業の最後の子ども達の感想から「ＡＥＴの先生と話せてよかった。」「わたしはほかの班のコーナーを回って、山という英語がわかったのでよかったです。」などの声が聞こえてきた。ヒントコーナーで調べたり、ＡＥＴの先生と関わったりしながら新しい英語表現にふれる喜びや満足感を感じている子ども達だった。

さらに研究会では、参観の先生方より活発な意見をいただくとともに講師の清泉女学院大学学部長渡邉時夫先生より小学校における英語活動の在り方や「聞く」ことの大切さ等についてご指導いただいた。また、今後の研究の方向も示していただき充実した会となった。

（児玉明代）

十年研修に思う
清水志保

「今年から、十年研が変わって大変だね。」この言葉を何度耳にしたことでしょうか。

実際のところ、まだ終わっていませんが、今日までやってきて、本当に大変です。

今まで行ってきた研修の中で、特に印象に残った研修を紹介します。

それは、社会体験研修の一つ、デイサービスセンターでの研修でした。

今まで、特別養護老人ホームやデイサービスセンターには、数時間の体験しかありませんでしたが、今回は、一日でした。朝、車でお年寄りを迎えに行くところから、一緒に仕事をさせていただきました。

センターの方々は、お年寄りの家に着くと、「○○さん、おはよう。」と、相手の方を名前で呼んでいました。親しい人なのかなと思いました。

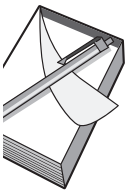
センターに戻ると、たくさんの利用者の方が集まっていました。血圧を測るなど、健康チェックをして、次は、入浴介助です。お風呂場で、何人もの利用者さんの髪や体を洗いました。初めに椅子にお湯をかけて、あたためておくことや、シャワーを自分の手にかけて温度を確認してから、背中にかけてあげることなどアドバイスしていただきました。夏だったので、入浴介助は大変な仕事でした。その後も、昼食介助、軽い運動など、一日を通して、どの場面でもセンターの方々が、利用者さん一人一人をお名前で呼んでいたこと、明るく接していたことが、大変印象に残りました。教員も、人間相手の仕事です。自分の態度や表情が、子ども達の大きな環境になっていることに、改めて気づかされました。

四月、十年経験者研修の一回目に、十年目くらいになると、わからないことがあっても人に聞かなくなるし、人の言うことも聞かなくなるという話を聞きました。十年研は、この仕事を続けていくかどうか、自分を見つめ直す機会なのだと思います。

しかし、十年目だからということで、本当に年間三十五日に及ぶ研修が必要なのか、ということには疑問が残ります。

初心に返ってみましょうと言われたり、皆さんに期待していますと言われたり、心境は複雑です。十年研を終えるとき、自分の心の中に、何が残るのか見定めたいと思います。

（高山小）



共生フォーラムに参加して
伊藤茜

本年度で第五回目となる、「共生フォーラム」が、去る十一月八日に信濃教育会館で行われました。本年度のテーマを『伝え合おう　学び合おう　明日に生きる力をともどもに』と題し、午前中に全体会で劇作家・演出家・語りべである瓜生喬さんの講演、午後に七つの分科会に分かれてさまざまな「共生」について考える会が行われました。

午前中の講演では、瓜生喬さんご自身作の語り芝居「早太郎」を始めとして、実際に参加者にもワークショップとして「花さき山」の語りの実演講座をさせてもらいました。普段、話している言葉に注目すると言葉の始めや終わりが曖昧になっていることが多くあります。特に子どもたちの発表を聞いていると、自信のなさからか、どうしても語尾が聞こえなくなってしまう姿が見られます。これはもしかすると、そんな大人の姿を耳にした結果なのかもしれません。これから子どもたちと接していく上で私自身も心がけていきたいところです。

また、語りのワークショップでは語りは活字を読むことではあるが、活字を伝えるのではなく、自分の思い浮かべる絵や風景を伝えるのであるということを教えて頂きました。物語を読んだときその場面からどんな風景を思い浮かべるかは語る人によって違うのかもしれません。だからこそその人の語りの味が出るのでしょう。受講者の中から四名が代表として前に出て語りを披露したのですが、初めは単調に聞こえたものも、少し意識を変えるだけで伝わり方が違うものであることを感じました。それでもやはり、プロの瓜生先生の語りは、はっと引き込まれるものがあり、お聴きした三つの物語にすっかり浸ってしまいました。瓜生先生がおっしゃっていた「語りはやってあげるという気持ちではなく語らせてもらう」という気持ちでやることが大切という姿勢がそのまま伝わる語りでした。

また、午後の分科会ではヨガの体験をし、自分の心を開き無にすることで相手を見つめる気持ちを持つということを学びました。

相手に向かって発信するときいかに相手を意識して向かえるか、「共生」は相手への思いやりの上に成り立つものであることを感じた研修会でした。

（日野小）

研鑽

すばらしい読書を求めて

吉澤孝志

視察校住所
①石川県松任市倉光二丁目一番地松任市教育委員会
②石川県松任市平木町一一二番地の一北星中学校
問題点・課題・感想　等

松任市の図書館システムの特色は司書の業務の内容にあります。もっとも関心のある司書の業務は、生徒・教師のニーズをどうやって図書館に取り入れていくかという情報の収集です。松任市の中学校の図書館はさながら、小中学生がどうしても行きたくなる子ども向けの書店のようでした。実際に昼休みの図書館利用の現場を見学しましたが、二十五分間の利用時間に百人を超える生徒が来館しました。（全校の約1/6）また、授業で使われる可能性のある本が、修学旅行はもちろんのこと、家庭科の保育の授業用、選択教科の音楽の授業用と各中学校や私立の中央図書館から集められ、三十人～四十人の生徒の調査学習に耐えられるだけの質・量でそろえられていました。（学校図書館資源共有型モデル地域事業）

もちろん、これだけの図書館のシステムを支えているのは行政からの多額の予算配当ですが、その予算を上手に執行しているのは、司書の情報量の多さと各学校の司書間の情報交換による良書の選択の確かさがあります。

現在、高山中学校では一人あたり平均十冊すこしの読書量があります。この量は決して少なくないのですが、図書館の利用者数をカウントすると松任市には遠く及びません。誰もが自分たちから読書したくなる環境作りが重要だと痛感しました。

※昼休みが始まって10分後の図書館

北星中学校の職員の方々の意見としては、この読書事業が始まった平成八年ごろ、小学生だった児童が現在の中学生であり、落ち着いた生活ができるもとになっているという声も多かったようです。

（高山中）

地域に学ぶ校内研修

小布施中学校

小布施中学校の校内研修では、様々なことを身近な地域から学ぶことができます。今までに行われてきた研修の中からいくつかの例を紹介したいと思います。

小布施町には、町が誇る歴史的文化遺産や、観光地を支える産業がたくさんあります。そんな町の財産から学べることはないだろうか、と企画してみました。

〈「高井鴻山を通して小布施を見る」研修〉

高井鴻山は、小布施町に葛飾北斎を招いた人物で、小布施町を語るのに彼の存在は欠かせません。この研修では、高井鴻山記念館元館長である山嵜実さんより、鴻山の人脈の広さや人柄などについて講演していただき、小布施町の発展に貢献した人物を知ることができました。そして、子どもたちが町の歴史を伝えていくのに教師として少しでも手助けができるような、基礎知識を教えていただきました。

〈栗菓子「小布施堂」の見学〉

小布施堂の副社長である市村良三さんからは、小布施町を観光地としてここまで世に広めてきた経緯を伺いました。斬新なアイディアがこれからも小布施町を益々発展させてくれるだろうと期待すると同時に、地元の中学生のアイディアも取り入れられるともっとすばらしくなるのではないかと思い、総合的な学習の時間などの活動の一環として、やはり地域との連携は大切であると感じました。

〈季節に合わせた研修〉

春には小布施中学校自慢の中庭に、ゴザを敷き、大きな唐傘を立て、桜の花びらが散る中で野点をして、おいしい抹茶をいただきました。

夏休みには、各学年の企画による研修会を行いました。陶芸教室や生活習慣病予防講習会、パワーポイントによるプレゼン講習会など、教員間で専門分野を活かした研修をしたり、『蘭学事始』を全員で読み合わせ、文中に含まれている人権問題について考えたりしました。

寒い冬には、地元の酒蔵「吉野や」にて工場見学をしつつ、利き酒なんかも…。

このように、私たちは地域のみなさんや、教員間の連携を大切にして、たくさんのことを学ぶことができました。

これからも、身近な地域から学ぶ機会を多く設け、日々研鑽していきたいと思います。

（前嶋加代子）

本校の宝㊸「日三省」

森上小学校

本校の校長室には、「日三省・寸心」の額が掲げられています。これは、『論語』の一節である

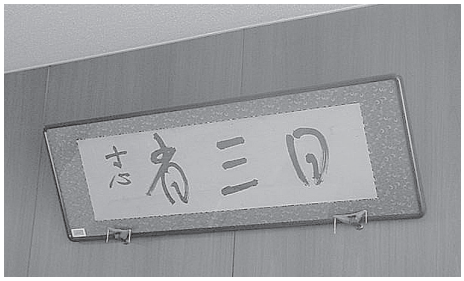
「曾子曰、吾日三省吾身、為人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳不習乎」

曾子先生のお言葉、「自分は日に再三、自分を反省している。人のために計画して不忠実な点はないか。朋友と交際して不信実なことはなか。（学んでまだ）習熟していないことを（人に）伝授してはいないか、などと。」

からとったものです。三省には、三度反省するという解釈と、下述の三項について反省するという解釈があるそうですが、「日三省」の文字からだけですと、一日三回と考えるのが自然な解釈かと思います。

この額が持ついちばんの素晴らしさは、これを揮毫して下さったのが西田幾多郎先生だという点です。「寸心」とは西田先生の号です。日本が世界に誇る大哲学者、西田幾多郎先生直筆の書が、本校に存在するようになった経緯ははっきりしませんが、特別な計らいがあったものと想像します。

本校では、いつ頃からか、尊いこの書と言葉を色紙にして卒業式の日に卒業生に贈ってきています。その添え書きには、こう述べられています。



「人には優しく、温かく、自らは厳しく、正しく、健やかに、たくましく、生きられたかどうか。いつも自分を振り返ってみるように、森上小学校の皆さんのため、西田幾多郎先生が、心を込めて書いて下さったもので、私達の生き方を教えてくれたものです。森上小学校の卒業生は、この言葉を一生の糧として、強く、正しく生きて下さることを望みます。」

（小林康一）

火ばち談義

中国語の思い出

小林真実

墨坂中　宮下正巳

大学で中国語を専攻していた。四年間の勉強で本当に簡単な会話ができるようになっただけだった。でも、そのころはそれを使ってみたくて仕方がなかった。卒業旅行で行った北京で、何となく言葉が通じて楽しめたせいで有頂天になっていた。

教員になってからも密かに中国語を使える日を期待していた。そしてその日は意外と早く訪れた。担任をしていた学級に中国からの帰国子女の子が転校してきたのだ。その子はとても人なつこい女の子で、自己紹介をするとぱっとうれしそうな顔をして色々と話しかけてきた。その口調の早いこと早いこと、何度聞き返しても聞き取れなかった。そのうちに会話が出来ないので、がっかりした表情をしてあまり話しかけてくれなくなってしまった。ショックだった。そのときの彼女の顔は十数年たった今でも浮かんでくる。

筆談で何とかしようとしたが、まだ小学一年生。中国語でも文字はおぼつかなかった。残された道はジェスチャーと単語を並べることだった。私は辞書をいつも近くに置き、単語で伝えた。しばらくして彼女の方から発音を教えてくれるようになった。

しかし、子どもの適応能力はすばらしい。あっという間に他の子になじみ、遊びの中でどんどん日本語を吸収していった。そして二年生の初めには手を挙げて発言するようになった。

私はというと、これを機会に再び勉強を深めていればよかったのに、時間がないことを理由に何もせず、どんどん単語を忘れていった。そして中国の情勢もどんどん変化していって、中国語は縁のないもののようになってしまった。

ところが、先日偶然彼女と会った。中学を卒業し、日本語があまりしゃべれない両親を支え、近くの中華料理店で一生懸命働く彼女を見た。私は再び学生時代の中国語の教科書を探し出したのだった。

（仁礼小）

中学校に赴任して

青木　聡

中高交流で高校から中学校へ赴任してから一年半が過ぎた。この一年半はやはり高校生と中学生の違いに戸惑い続けてきたように思う。

自分のクラスが一年生の終わる頃のことである。女子の中で人間関係のトラブルがあった。以前は仲が良かったのだが、あることをきっかけとして一人が仲間から外れてしまった。外れてから「前にあんなことを言った」「〇〇を返してくれない」など、その子に対して不満が一気に噴出し、責めるようになっていた。多数対一人という典型的ないじめととらえていた。

全員から話を聞き、指導していこうと思ったのだが、問題はなかなか解決せず、ますますこじれていった。原因は多数派の子たちが「先生は私たちの話を聞いてくれない」「私たちがいじめをしたと決めつけている」という感覚をもってしまったことである。もちろん話は聞いたし、「いじめだ」とは一切口に出してはいなかった。この子たちは私のちょっとした態度などから、そのように感じ取ってしまっていたのである。

それから、もう一度一人ずつ話を聞く機会を設けた。今度は、なるべく共感的な態度で聞くように努めた。また、心の相談員の後藤先生にも同席してもらい、二人でしっかり話を聞くようにした。中心的だったM子は、しばらく話しているうちに「小学生の頃の自分を見ているようで、それできつく当たっていたのかもしれない」と言い始めた。また「あれ、なんでこんなこと言っちゃったんだろ」と言う。共感的にこちらが受け止めてあげたことで、ようやく本当の気持ちに気づけたようである。

この一件で気づいたことは私の持っていた感覚と生徒の感覚にはかなりのずれがあったということである。こういう失敗を繰り返しながら、ここまでやってきた。やはり中学生は思った以上に幼い部分を持っている。しかし、幼いが故に劇的に変わるときがある。中学校での勤務はやはり大変である。しかし、大きな、劇的な変化に立ち会える喜びが中学校での魅力のような気がする。

あと残り半分、なるべく多くの喜びを味わいたいと思う。

（東　中）

めだか学級ができました

小笠原百合子

今年度私は、日野小学校に赴任し、めだか学級の担任になりました。めだか学級は、肢体不自由自律学級です。今まで長野県には肢体不自由自律学級はなかったのですが、今年度から日野小学校を含め、二つの肢体不自由自律学級が長野県にできました。

現在めだか学級には、三名の車椅子を利用する児童が在籍しています。三名の児童は、障害の種類は同じですが、障害の度合いが一人ずつ違うので、当然教育課程も介助の内容も違います。

一年生の児童は、一時間目が始まるまでの時間に、めだか学級で歩行訓練をした後は、体育の時間以外全て、通常学級で学習しています。

また五年生の児童は、算数と国語、体育、そして訓練をめだか学級で行っていますし、六年生の児童も同様に、めだか学級と通常学級の双方で学習しています。

通常学級での授業には、私と須坂市からの介助員の二名が分担して介助に入りますし、めだか学級での学習もあります。一人ずつが別々の時間割で生活しているので、どうしても一対一の対応が必要になります。めだか学級ができたことによって、児童一人一人の教育ニーズに合った支援ができるようになったのではないかと思います。

めだか学級の児童は日野小学校に自然に受け入れられています。五、六年生の二名は入学時から昨年度まで知的障害自律学級に在籍していました。障害の種類の違う八名の児童を担任と介助員一名で見ていたので、大人の手が足りない時には他の児童が二人の手助けをしてくれたり、保護者の中にもアテンダントとして二人をサポートして下さったりする方もいました。そんな学校生活の触れ合いの中で自然にこの子たちを理解する事ができたのだと思います。

素直で明るいこの子たちを今まで見守ってきた保護者や先生方の思いを忘れずに、めだか学級と共に成長していけたらなあと思っています。

（日野小）

編集後記

平成十五年も年の瀬が近づいてまいりました。

世の中、児童虐待、家族殺傷事件、テロと物騒ですが、命の尊さを思うとき、人間の生のすばらしさを思うとき、いよいよ教育の担う意味を痛感させられます。本号は、研修をテーマと致しました。いかがだったでしょうか。

お忙しい中、原稿をお寄せいただきました皆様には、厚く御礼申し上げます。